

IIAS塾ジュニアセミナーテキスト
(VOL. 02020)

未来に向かう人類の英知を探る
ー時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたかー

(政治・経済分野)

渋沢栄一・五代友厚に学ぶ
～経済は道徳に不可欠であり、
道徳は経済に不可欠である。～

公益財団法人国際高等研究所
IIAS塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2017年4月11日開催の第46回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲ
ーテの会』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」
開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。
※本テキストは、2019年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用さ
れたものである。

未来に向かう人類の英知を探る
－時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか－

大変革期における企業家 －東の渋沢栄一、西の五代友厚－

幕末から明治の時代は現在と同じく、いやそれ以上に、激動期であった。封建制の崩壊、鎖国から開国へ、王政復古と維新期の諸変革、文明開化、産業革命の開始など政治・経済・社会のあらゆる面で激しい変化があった。しかし、こうした局面にあっても大多数の国民は変化の意味を十分には理解できなかつたし、理解したとしても、それに対応した行動をとるのをためらっていた。社会全体が変革にチャレンジするためには、いち早く西洋の進んだ文明についての情報を得、彼我のギャップを知覚して、革新的企業家活動に乗りだし、変化のイデオロギーを創出するビジネスリーダーの出現が不可欠であった。東の渋沢栄一と西の五代友厚はこの役割を演じた代表的存在であった。そこで、この講演ではこの2人にスポットライトをあてて、その行動と思想の特質、現代的意義についてお話しすることにしたい。

宮本 又郎 (Matao MIYAMOTO)

1943年福岡市生まれ、神戸大学大学院経済学研究科修士課程修了、経済学博士。大阪大学経済学部教授、同経済学部長、関西学院大学経営戦略研究科教授を経て、現在、大阪大学名誉教授、大阪企業家ミュージアム館長、関西学院大学客員教授、江崎グリコ（株）社外監査役。専門は日本経済史・経営史。著書に『近世日本の市場経済』（有斐閣）、『日本企業経営史研究』（有斐閣）、『企業家たちの挑戦』（中央公論新社）、『企業家たちの幕末・維新』（メディアファクトリー新書）、『商都大阪をつくった男 五代友厚』（NHK出版）、『渋沢栄一』（PHP研究所）、『江崎利一』（PHP研究所）などがある。受賞歴に第31回日経経済図書文化賞、第5回総合研究開発機構政策研究東畑記念賞などがある。



目次

はじめに — 渋沢栄一と五代友厚に対する評価 —

I 実業家になるまでの経歴

- (1) 青年に至るまで、その生い立ち
- (2) 思想形成期における境遇
- (3) ヨーロッパでの見聞
- (4) 明治新政府への奉職

II 実業家活動と経済近代化への貢献

- (1) 実業家としての実績
- (2) 経済界における貢献
 - ① ニュービジネスモデルの唱道と実践
 - ② ビジネスリーダーとしての活躍
 - ③ 新しい時代を支える人材の育成

III 渋沢と五代の経済思想とその影響

- (1) 渋沢の「道徳経済合一説」
 - ① 道徳と経済、バランス論と一致論
 - 経済は道徳に不可欠であり、道徳は経済に不可欠
 - ② 「道徳経済合一説」の背景
 - 商道徳の退廃、商秩序の乱れ
 - 商業（ビジネス）蔑視観の克服、近代産業への人材を供給する必要性
- (2) 五代の経済思想逸話が、語るその一端

IV 渋沢と五代の行動と思想から学ぶ

- (1) その行動から学ぶ
 - ① 「マージナルマン」とイノベーション
 - ② 多面的活動を展開
 - ③ ビジョンのニューディール（新規まき直し）
 - ④ 渋沢と五代の相違点
- (2) その思想から学ぶ
 - ① 士農工商の身分秩序に収まりきれない存在
 - ② ビジネスの道徳性、公益性を主張
 - ③ ニュービジネスモデルの提唱

おわりに — 社会には、ある種の非合理的人間（私利私欲のない人間）が必要 —

次代を拓く君たちへ — 宮本又郎からのメッセージ —
先人の企業家精神と高い志を学ぼう

2017年4月11日開催

第46回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「大変革期における企業家－東の渋沢栄一、西の五代友厚－」

講演者：宮本 又郎（大阪大学名誉教授）

はじめに ー 渋沢栄一と五代友厚に対する評価 ー

東の渋沢栄一、西の五代友厚とよく言われる。渋沢は1840（天保11）年から1931（昭和6）年まで長寿を全うし、91歳まで生きた。五代は1836（天保6）年から1885（明治18）年まで生き、49歳で亡くなっている。したがって、実業家としての成果は、はるかに渋沢の方が多くのもをを残している。しかし、関西にとっては、五代の残した功績は大きい。

渋沢も五代もいろいろな人が取り上げて評価している。渋沢については、有名な経営学者のドラッカー¹が、次のように高く評価している。「渋沢の大きな功績は一身にして立案者と実行者を兼ねて事業を推進したこと・・・思想家としても行動家としても一流。百年以上も前に死んだ人がつくった組織がいまだに存在し、見事に機能しているというのは極めて珍しい。渋沢は稀有の存在であり、大変ユニークな人物」また、五代については、作家の織田作之助²の小説『大阪の指導者』の冒頭に、「明治の大阪の指導者として、開発者として、友厚の右に出る人は一人もいない。比較し得る人もない。もし、彼が明治の初期の大阪を指導しなければ、恐らく私たちは今日の大阪の殷賑をみることができなかつたかもしれない」というくだりがある。

I 実業家になるまでの経歴

（1）青年に至るまで、その生い立ち

<渋沢>

渋沢は1840（天保11）年、武蔵国血洗島村（現在の埼玉県深谷市）に生まれた。家は大変な豪農であり裕福であった。農業を営むと同時に養蚕や、藍染料の製造、販売などの業を営んでいた。その所得を調べてみると、当時の日本を代表する豪商、三井家とほとんど変わらない。それほど裕福な豪農であった。もう一つ重要なことに、漢学者の尾高惇忠³に就いて長い間儒学を勉強したことがある。それにより尊王



渋沢栄一
Public domain, via
Wikimedia Commons

¹ ピーター・ドラッカー（Peter Ferdinand Drucker, 1909-2005）：経営学研究者に対してのみならず、経営者に対しても大きな影響を与えた世界的に著名な経営学者。引用文は、NHK「明治」プロジェクト編著『明治－変革を導いた人間力』日本放送出版協会、2005年から。

² 織田作之助（1913-1947<大正2-昭和22>）：日本の小説家。終戦後太宰治、坂口安吾、石川淳らと共に無頼派、新戯作派と呼ばれ「織田作（おださく）」の愛称で親しまれる。

³ 尾高惇忠（1830-1901<文政13-明治34>）：渋沢栄一の従兄弟で、漢学者として知られたが、明治維新後は富岡製糸場の初代場長、第一国立銀行仙台支店支配人などを務めた。

攘夷思想を抱くこととなった。

<五代>

一方、五代は1836(天保6)年、渋沢が生まれる4年前に薩摩(現鹿児島市)で生まれている。五代の家は代々儒学者の家であり、彼もよく勉強した。幼名を才助といった。これは島津斉彬⁴が命名したと言われている。非常に才能があったことから才助と命名されたという。この家の石高は300~500石で、大久保利通とか西郷隆盛とかの家の石高は100石ぐらいであったから、中級くらいの武士であった。そして、17歳で藩に勤めることになる。



五代友厚
Public domain, via
Wikimedia Commons

渋沢の家は、農民としては上層農民であるが、商家でもあり、普通の農民ではない。五代の家は、武士ではあるが儒学者の家でもあり、文治派の武士といえる。そのような存在が二人の特徴でもある。

明治維新时期の偉人の生誕年を調べてみると、1830年代から40年代の人が多い。西郷は20年代だが、大久保、岩崎弥太郎⁵、五代、渋沢、それから坂本龍馬⁶と、明治維新时期のヒーローの多くは、30年代の生まれである。明治維新(王政復古)は1868年なので、当時、この人たちは皆30代の人だった。若い人が、この明治維新を成し遂げたのである。

生誕地に関しては、渋沢については埼玉であり、深谷市に立派な生家が残っている。五代については鹿児島であるが、ほとんど忘れられた存在になっていた。NHK連続テレビ小説『あさが来た』で一躍人気者になり、その生誕地が整備され、今、立派な公園になっている。

なお、五代の大阪の家は、大阪市西区(鞆^{うつぼ}公園内にある大阪科学技術センターのところ)にあった。

(2) 思想形成期における境遇

<渋沢>

渋沢は、尾高惇忠などの影響を受け、一時期、尊王攘夷思想に傾く。横浜の外国人居留地の襲撃計画にも加わる。ところが、その計画が漏れ、これは危ないと中止する。中止して、彼は江戸で知り合っていた一橋家の家臣のところに行って助けを求め、京都でかくまってもらったこととなった。その後、一橋家の家臣にしてもらい、そこで、彼は才能を発揮し、一

⁴ 島津斉彬(1809-1858<文化6-安政5>)：薩摩藩の第11代藩主。島津氏第28代当主。薩摩藩の富国強兵に成功した幕末の名君の一人である。西郷隆盛ら幕末に活躍する人材も育てた。

⁵ 岩崎弥太郎(1835-1885<天保5-明治18>)：実業家。三菱財閥の創業者で初代総帥。明治の動乱期に政商として巨利を得た最も有名な人物。

⁶ 坂本龍馬(1836-1867<天保6-慶応3>)：江戸時代末期の志士、土佐藩郷士。貿易会社と政治組織を兼ねた亀山社中(後の海援隊)を結成した。薩長同盟の成立に尽力するなど倒幕および明治維新に関与した。

橋家の播州領地での木綿販売や、兵士の募集で実績を上げる。そのことで抜擢をされ、一躍25石7人扶持の武士になる。その後、一橋家出身の徳川慶喜が第15代将軍になったことから、自動的に幕臣になった。もともと討幕派であったが、佐幕派に属することになったのである。

<五代>

五代は20歳の時に長崎海軍伝習所⁷に薩摩藩から派遣された。ここには、例えば、勝海舟⁸などもいた。幕臣だけでなく、いろいろな藩から優秀な人が送られてきていた。五代はそこでの生活も含めて通算11年くらい長崎で暮らし、いろいろな人と知り合い、藩を越えた人脈形成をした。勝海舟のほか榎本武揚⁹、坂本龍馬、更にグラバー¹⁰などとも知り合った。



長崎海軍伝習所

Public domain, via Wikimedia Commons

これが彼にとって非常に大きな財産になった。20歳から通算11年も長崎にいたので、ある意味では薩摩から飛び出た存在になっていた。その間に薩摩藩の命令を受けて、上海に2回渡航し、軍艦や、鉄砲を買うなどした。その時期、高杉晋作¹¹などとも接触している。その後、薩英戦争¹²の際に、五代は寺島宗則¹³とともに捕虜になってしまう。

⁷ 長崎海軍伝習所：1855（安政2）年に江戸幕府が海軍士官養成のため長崎西役所（現在の長崎県庁）に設立した教育機関。幕臣や雄藩藩士から選抜して、オランダ軍人を教師に、蘭学（蘭方医学）や航海術などの諸科学を学ばせた。

⁸ 勝海舟（1823-1899<文政6-明治32>）：江戸時代末期（幕末）から明治時代初期の武士（幕臣）政治家。

⁹ 榎本武揚（1836-1908<天保7-明治41>）：武士（幕臣）、化学者、外交官、政治家。昌平坂学問所、長崎海軍伝習所で学んだ後、幕府の開陽丸発注に伴いオランダへ留学した。明治維新の時、五稜郭にたてこもり官軍に抵抗するが、のち許され、駐露公使としてロシアと樺太・千島交換条約を締結した。

¹⁰ グラバー（Thomas Blake Glover,1836-1911）：スコットランド出身の商人。武器商人として幕末の日本で活躍した。日本で商業鉄道が開始されるよりも前に蒸気機関車の試走を行い、長崎に西洋式ドックを建設し造船の街としての礎を築くなど日本の近代化に大きな役割を果たした。

¹¹ 高杉晋作（1839-1867<天保10-慶應3>）：江戸時代後期の長州藩士。幕末に長州藩の尊王攘夷の志士として活躍した。奇兵隊など諸隊を創設し、長州藩を倒幕に方向付けた。

¹² 薩英戦争（1863年8月15日-17日<文久3年旧暦7月2日-4日>）：イギリスと薩摩藩の間で戦われた戦闘。文久2年旧暦8月21日（1862年9月14日）に武蔵国橘樹郡生麦村で発生した生麦事件の解決と補償を艦隊の力を背景に迫るイギリスと、攘夷実行の名目のもとに兵制の近代化で培った実力でこれを阻止しようとする薩摩藩兵が、鹿児島湾で激突した。

¹³ 寺島宗則（1832-1893<天保3年-明治26>）：政治家。日本の電気通信の父と呼ばれる。第4代外務卿として活躍した。

渋沢と五代の共通点の一つに挫折体験を挙げることができる。渋沢は、横浜の外国人居留地を襲撃しようとして失敗した。五代は薩英戦争に際し捕虜になってしまった。当時は、捕虜になるのは大変恥ずかしいことであり、やはり挫折したことになる。

<渋沢>

その後、渋沢は徳川慶喜の弟の徳川昭武¹⁴がパリ万博の代表になったことから、それに随行してパリに行く。武士ばかりではお金の管理もできないということで、今でいう旅行会社の添乗員のような存在だったとあってよいだろう。ところが、ここでもいろいろと才能を発揮した。その時に、師匠の尾高惇忠に手紙を出している。そこには、以前は攘夷思想であったが、これからは開化思想にならなければならないと、その考えを180度転換したことが書かれている。彼は実際に、使節団の書記役（兼）会計役を務め、銀行預金や為替などの実務全般に携わったことで、ヨーロッパの資本主義を自ら体験していった。そうしたことから攘夷から文明開化へと、その思想を移していった。



1904年パリ万博、エッフェル塔
CC BY-SA 2.0 via Wikimedia Commons

<五代>

五代は、早くから開国思想を持っていた。薩英戦争で捕虜になり、一時期逃亡を余儀なくされたが、許されて薩摩藩に戻る。その時、建言書を薩摩藩に提出している。「攘夷思想などという馬鹿なことを言っている者がいるが、そういう時代ではない。薩摩も開化しなければならない」として、英国に留学生を派遣することを提言する。これが翌年認められ、彼は15人の学生を連れて、3人の引率者の1人としてヨーロッパに行く。彼自身は留学生ではなかったので、ヨーロッパ諸国を訪問し、経済の実情を視察するとともに、薩摩藩のために紡績機械や武器などを買っている。

それと同時に、日本は徳川幕府だけが日本の代表ではなく、薩摩も日本代表であり幕府と同等だとして、パリ万博の出展を申請している。出展交渉で、それを認めさせた。徳川幕府としては、恥をかかされたこととなる。加えて、ベルギーの商人モンブラン¹⁵と組んで、ベルギー商社を設立する計画さえ立てている。

このように、この二人は同じ頃にヨーロッパに行き、ヨーロッパの資本主義的発展を目の当たりにして大変驚いたという共通体験がある。当時の写真を見ると、両方とも洋装をしている。

¹⁴ 徳川昭武（1853-1910<嘉永6-明治43>）：清水徳川家第6代当主、のち水戸藩第11代（最後）の藩主。

¹⁵ モンブラン（Charles de Montblanc, 1833-1894）：日本のお雇い外国人。パリで同好の士と日本文化研究協会（Société des études japonaises）を作り、フランスにおける日本語・日本文化研究を推進した。

(3) ヨーロッパでの見聞

二人ともヨーロッパ全域を回っているが、渋沢はフランスによく行った。五代はイギリスが中心であった。

<渋沢>

当時のフランスでは、サン・シモン主義¹⁶という思想哲学がはやっていた。サン・シモン主義は、初期社会主義とも言われているが、基本的には、フランスは当時のイギリスに比べて遅れた国であったことから、その経済発展を図るための戦略として農工商従事者を尊重しようというものである。この農工商従事者には資本家も労働者も含んでおり、これを大事にしなければならないという思想である。

つまり、国を発展させるためにはパイの切り方、いわゆる分配よりも成長が重要であり、パイを大きくすることの方が大事だと主張している。そのためには金融、すなわちお金の流れをよくすることが大事である。お金を持っているにもかかわらず、それを遊ばせている人から使う人にお金を回そう。そのためには銀行と株式会社が必要だというのがサン・シモン主義である。もう一つは物の流れをよくしないといけない。そのためには鉄道と運河が必要である。銀行と株式会社、それに鉄道と運河、これが大事だというのがサン・シモン主義である。このことを渋沢は学んで帰った。

<五代>

五代は、イギリスから友達に送った手紙で「富国無くして強兵なし」と書いている。徳川幕府は強兵に一生懸命であるがこれは愚かなことである。まず国家戦略としては、経済が先であるというのである。また彼は、経済の基本は「インジストレード」と「コンメンシアル」であるとする。「インジストレード」はインダストリー、すなわち工業で、「コンメンシアル」は商業というよりむしろ貿易である。経済の近代化のためには、工業と貿易が重要であると言うのである。そのことを踏まえて薩摩藩に18箇条からなる建言書を送っている。もう一つは「商社合力」、これは株式会社のことであるが、この重要性を唱えた。

渋沢も「合本主義」を強調し、人々のお金を集める株式会社のようなものが重要であると言っている。五代の「商社合力」とほとんど同じ意味である。これがヨーロッパ資本主義の一番の肝であることを、この二人は喝破していたのである。慧眼というべきであろう。

(4) 明治新政府への奉職

<渋沢>

1868（慶応3）年、王政復古により徳川幕府が倒れた。それで渋沢は急いで帰国する。帰ってきてすぐさま静岡に引っ込んでいた徳川慶喜を訪ねる。そうした状況の下で、大隈重信が渋沢の才能を見込んで、大蔵省に来るよう誘う。ところが渋沢は、もともと尊王攘夷思想を持ち、討幕派だったにもかかわらず幕臣になった。もう一度また、幕府を倒した明治新政

¹⁶ サン・シモン主義：フランスのユートピア社会主義者サン＝シモン（1760-1825）の影響を受けた思想家の倫理と論理体系。

府に入るのは気が進まない。それに対して、徳川慶喜から明治新政府で活躍することを勧められ、大蔵省に入ることを決心する。大蔵省に入って彼が行った仕事は、地租の金納化や鉄道の敷設、さらに1871（明治4）年、新貨条例を制定し、江戸時代の貨幣単位である「両」とか「匁」を改め、「円」単位の貨幣制度をつくった。それからアメリカの銀行制度に範をとって国立銀行条例を作った。このように、その後の日本の針路を決めた重要な経済改革の多くを立案し実現した。また、その時の明治政府は大変な財政赤字だったので、財政整理案を上司の井上馨¹⁷と共に出した。しかし、大隈に反対されたことから政府を辞めてしまう。

<五代>

五代は、その能力を認められて明治新政府に採用され、外国事務掛あるいは大阪府判事に任命される。そこで、外交官としての業務とともに、外国貿易のために開港した大阪港の整備や居留地の建設に当たり、また貿易商社などを作った。ところが1年くらい勤めたところで、横浜への転勤辞令を受け任地に赴く。他方、大阪の商人や部下・友人に帰ってきてほしいと嘆願される。そこで政府を辞め下野することとなる。

こうして二人とも政府の高級官僚であったが、それを数年で辞めて実業界に入った。

II 実業家活動と経済近代化への貢献

(1) 実業家としての実績

<渋沢>

実業家としての渋沢は、よく言われているとおり、500社を超える企業に関係していた。多いのは陸運や銀行関係である。お金の流れと物の流れを作ることが大事であることを学んだと書いたが、そのとおりに実践したのである。渋沢が関係していた企業で、今残っているものは、第一国立銀行（現在、みずほ銀行）など、日本経済の中枢を担っている企業が多い。こういう企業を創設し、経営に参画したのである。

<五代>

五代の関わった事業としては、例えば、薩摩藩の事業であった小菅修船場¹⁸がある。これは後に三菱の造船所の一部になった。彼のビジネスとして一番大きかったのは全国の鉱山の管理を手掛ける弘成館¹⁹であり、全国に26の鉱山を持っていた。さらに、藍染料に係る

¹⁷ 井上馨（1836-1915<天保6-大正4>）：長州藩士。明治維新後は、外務卿、外相、蔵相などを歴任。不平等条約改正のために風俗や生活様式を西洋化する欧化政策を進め、近代的な銀行制度導入や三井物産などの貿易商社創設に深く関わり日本の近代資本主義の基礎造りに尽力した。

¹⁸ 小菅修船場：日本初の蒸気機関を動力とする曳き揚げ装置を設置した西洋式ドック。五代友厚が小松帯刀、グラバーと造る。

¹⁹ 弘成館：五代が積極的に取り組んだ鉱山開発の管理会社として開かれたもの。

会社、朝陽館²⁰などを作った。このように多くの会社を設立したが、残念ながらそれらの会社は現在あまり残っていない。

(2) 経済界における貢献

一番目は、ニュービジネスモデルを提唱したことである。二人とも「合本主義」とか「商社合力」という表現で、これからの時代は共同出資企業でなければいけないことを強く主張した。二番目はビジネスリーダーとして、財界人として活躍したことである。民間経済の指導者の役割を果たした。渋沢は民間外交でも活躍した。三番目は教育に非常に関心があったことである。四番目はビジネスの新しいビジョンを提唱したことである。渋沢の「道徳経済合一主義」は有名である。この四つが二人の際立った貢献である。

① ニュービジネスモデルの唱道と実践

<渋沢>

渋沢は次のように言っている。「ヨーロッパに滞在して約二ヶ年、最も感じたのは、事業が合本組織で非常に発展していることと、官民がすこぶる親密であることである。合本組織で商工業が発展すれば自然商工業者の地位が上がって、官民の間が接近して来ることを悟った」「一人だけ富んでそれで国は富まぬ。国家が強くなければならぬ。全般的に商工業者の地位が卑しい、力が弱いという日本の現状を救うためには、どうしても全体を富ませるということを考えるほかない。全体が富むためには、合本法でいくほかはない」。つまり、合本主義、株式会社は単なる経済組織ではなくて、社会の中における商工業者の地位を上げ、国を富ませるための社会制度であると渋沢は考えたのである。

<五代>

五代が留学していた時に使っていた日記を見ると、「商社合力」の記述がたくさんある。これは貿易商社の意味ではなく、株式会社の意味である。商社、つまり、皆で力を合わせることでできる会社を作らなければいけないことを強く主張をしている。

この「商社合力」とか「合本主義」には大きな意味があった。明治の日本には非常に大きなビジネスチャンスがあった。先進国から取り入れることのできる文明や技術や知識が無限にあった。すでに外国で発達していた鉄道とか紡績とか銀行とかを移植すればビジネスとなる。しかし、これをやるには、一般的には大資本を要し、リスクが高い。例えば三井とか住友とか、そういう豪商であればできるかもしれないが、江戸期の商家のような単独の企業では非常に難しい。普通の人にはできない。だから皆で力を合わせないといけない。だから株式会社形態の企業が最適であると主張したのである。

だが、それを進めるためには、次のような問題があった。

²⁰ 製藍所朝陽館：五代が国産の藍がインド産のものに圧されるのを憂い、蒸気機関を動力とする最新設備を導入して操業を始めた製藍事業所。

一つには、当時日本には会社という概念がなかった。そこで、人々にその仕組みを知ってもらわなければならない。渋沢は会社を作るマニュアル本のようなものを実際に編纂している。こうした本を作り、会社というものを人々に納得させることを先ず行った。

二つ目は、資本市場が未発達だったことである。株式会社を作ると言っても、株式を売買する市場が発達していなかった。市場で株式資本を調達するには難しかったのである。したがって、誰か有力な経済人が、お金を持っている華族とか地主とか大商人を回って出資してくださいと説得する以外に方法はない。この場合、説得しに回る人の信用が非常に重要だった。いわゆる奉加帳方式による資本募集であったと言ってよい。奉加帳は、お寺とか神社がお金を集めるときに使うものだが、奉加帳の筆頭人に誰が名を連ねているかが非常に重要な意味をもつ。渋沢や五代は経済界において大変信用があり、奉加帳の筆頭人としてふさわしい人だったのである。

三つ目には、人材が不足していた。株式会社を作っても経営者や技術者がいない。投資家の多くは取締役になるが、今日のと違い、非常勤で会社に毎日は来ない。当時は、お金を出す人は経営に参加しないという時代だった。会社の日常の経営は支配人とか技術者に任せるのが普通であった。そうすると、その経営者とか技術者を養成したり、あるいは見つけてくるのが非常に大事なことになる。そういう意味で、「合本主義」を実践するためには、お金を集める力とともに人材ネットワークを活用できる力がないといけない。

江戸時代の商家は自分の家の中にお金も人的資源も経営資源も抱えていた。ところが渋沢や五代は、いまやそういう時代ではない。お金を持っている人、人的資源のある人、経営資源、これは別々に存在している。これらを集合させる、それが株式会社であると考えたのである。このような株式会社づくりを実践したのがこの二人であったということになる。

四つ目は、今日の言葉でいうとコーポレート・ガバナンス（企業統治）の問題である。会社ができると大株主は取締役になるが、彼らは非常勤で日常はその会社に出て来ない。しかし、文句は支配人や技師長に言う。また株主間での利害の対立もある。したがってよく紛争が起こった。大株主間の紛糾とか、あるいは株主と幹部社員（支配人や技師長）との間に対立が起こる。こういう紛争が起こったときに調停する人が必要で、渋沢や五代はその調停者の役割を果たしたのである。

② ビジネスリーダーとしての活躍

<渋沢>

渋沢は、今の東京商工会議所の前身である東京商法会議所、東京証券取引所の前身である株式取引所、銀行集会所などのような経済団体をたくさん作っている。東京商法会議所について言えば、幕末、日本はアメリカなどと不平等条約を結んだ。これを改正するのが明治新政府にとっての大きな政治的課題だった。これに対して大隈重信などが、外国の代表に向かって、不平等条約の改正は日本の世論であると言ったところ、外国の外交官から、日本には経済界の世論が形成されるような場はないではないか、ヨーロッパには、Chamber of

Commerce (商業会議所)がある」と言われた。そこで大隈らは渋沢にヨーロッパの Chamber of Commerce のような商工業者の団体をつくることを奨め、渋沢がそれに応じて創立したのが東京商法会議所であった。

<五代>

五代は、大阪商法会議所、今日の大阪商工会議所を作った。大阪商法会議所は、東京と同じ年にできたが、設立経緯が少し違う。江戸時代、大阪には株仲間²¹というものがあつた。これを明治新政府が解散させてしまい、経済秩序が乱れてしまった。それをなんとか立て直そうとして作ったのが大阪商法会議所である。

③ 新しい時代を支える人材の育成

<渋沢>

渋沢も教育への関心が非常に強かった。まず東京商法講習所、これは森有礼²²の私塾として作られたものだが経営が難しくなり、東京商法会議所にその管理が依頼される。渋沢がそれを引き受けた。日本がこれから経済的に発展するためには商学校、商業学校がいる。それが無いのはおかしい。武士に剣術を教える学校があるのであれば、商業を教える学校がいるだろう。その商学校の設立趣旨を書いたのが福沢諭吉である。これに基づいて作られたのが東京商法講習所である。これが後に国に移管され、東京高商、東京商科大学となり、現在の一橋大学になった。

渋沢は女子教育にも非常に関心を示した。女子教育奨励会²³、現在の東京女学館²⁴を作った。それからNHK連続テレビ小説『あさが来た』で話題になった日本女子大学の設立にも尽力した。大阪の女学校の校長であった成瀬仁蔵²⁵が、広岡浅子²⁶の志に共鳴して大阪で女子大学校を作ろうとして、ずいぶんお金を集めたが少し足りなかった。最終的には広岡浅子の実家三井家(小石川家)が東京目白に所有していた約6000坪の土地の提供があり、それ

²¹ 株仲間：商工業者が結成した仲間組合で、幕府の公認を受けることが多かった。業界のルールや規則を定めたりした。

²² 森有礼(1847-1889<弘化4-明治22>)：薩摩藩士、外交官、政治家。初代文部大臣を務めた他、一橋大学の前身の東京商法講習所を創設し、明六社会長(発起人)、東京学士会院初代会員、大日本教育会名誉会員を務め、明治六大教育家に数えられる。

²³ 女子教育奨励会：「日本の貴婦人に欧米諸国の貴婦人と同等なる佳良の教化及び家事の訓練を受けさせる」ことを目的に1887(明治20)年に設立された団体。学校法人東京女学館の母体となった組織。

²⁴ 東京女学館：1888(明治21)年に『国際性を備えた知性豊かで気品ある女性の育成』を建学の精神として、伊藤博文、渋沢栄一、岩崎弥之助、外山正一、コンドル、アレクサンダー・ショーなど、日本の近代化の礎を築いた明治の元勳を初めとする各界の名士により創設された。

²⁵ 成瀬仁蔵(1858-1919<安政5-大正8>)：キリスト教牧師(プロテスタント)であり、日本における女子高等教育の開拓者の1人であり、日本女子大学の創設者として知られる。

²⁶ 広岡浅子(1849-1919<嘉永2-大正8>)：三井家から江戸時代以来の大阪の豪商広岡に嫁ぎ、実業家、教育者、社会運動家として活躍。明治を代表する女性実業家。

によってできたのが日本女子大学である。それを熱心にバックアップしたのが渋沢であった。

<五代>

五代は薩摩藩の留学生 15 人をイギリスへ引率して行った。彼は約 11 カ月間そこに滞在した。薩摩藩の学生にはもっと長くいた者もいた。留学生のなかには、後に大活躍し重要人物となった人が多い。引率者であった寺島宗則²⁷ は外交官として有名になった。町田久成²⁸ は上野の国立博物館の初代館長。畠山義成²⁹ は東京開成学校、今の東京大学の初代校長。村橋久成³⁰ はサッポロビールを作った人物。それから教育勅語を作った森有礼もこの中の一人である。また、大変数奇な運命をたどった長澤鼎³¹ もいる。彼は 13 歳で渡欧し、後にスコットランドに行き、それからアメリカに渡って、ワイン醸造で成功した。このように非常に多くの優れた人物を輩出した。

鹿児島県のいちき串木野市、ここから留学生の船が出た。そこに留学生記念館が数年前にできた。小さな記念館だが、なかなか面白いミュージアムである。また鹿児島中央駅の駅前に留学生 15 人と引率者の銅像が建っている。

五代は、商学校を建てることを主唱していた福沢諭吉に影響を受け、加藤政之助³² という福沢門下の人を派遣してもらい、大阪商業講習所を作る。これは商家の子弟を対象にして作られたものだが、その後、転々として現在の大阪市立大学と、ビジネス系のハイスクールである天王寺商業高等学校（現在は大阪ビジネスフロンティア高校）になった。これらの学校には五代の銅像が建てられている。



薩摩藩英国留学生記念館
STA3816, CC BY-SA 4.0, via Wikimedia Commons

²⁷ 寺島宗則（1832-1893<天保 3-明治 26>）：薩摩藩士。政治家。日本の電気通信の父と呼ばれる。

²⁸ 町田久成（1838-1897<天保 9-明治 30>）：薩摩藩士。元治 2 年藩命で留学生として森有礼らと渡英。維新後、文部大丞などを歴任。のち内務省博物館長として博物館創設につくし、初代帝国博物館館長となる。

²⁹ 畠山義成（1842-1876<天保 13-明治 9>）：薩摩藩第一次英国留学生として英米留学を経験したのち中央教育行政に深くたずさわり、また東京開成学校（東京大学の前身の一つ）、東京外国語学校（東京外国語大学の前身）の校長、東京書籍館（国立国会図書館の前身の一つ）、東京博物館（国立科学博物館および小石川植物園の前身）の館長を歴任した。

³⁰ 村橋久成（1842-1892<天保 13-明治 25>）：薩摩藩士。戊辰戦争、箱館戦争など従軍の後、1871 年新政府の北海道開拓使。1876 年札幌で日本初のビール工場（サッポロビールの前身）を稼働させた。

³¹ 長澤鼎（1852-1934<嘉永 4-昭和 9>）：薩摩藩士。「カリフォルニアのワイン王」「葡萄王」「バロン・ナガサワ」と呼ばれる。

³² 加藤政之助（1854-1941<嘉永 7-昭和 16>）：福沢諭吉の紹介で五代友厚が経営する大阪新報記者となり、同紙にて、福沢が提唱していた商業学校設立の啓蒙キャンペーンを行い、大阪での商業講習所設立に尽力する。

III 渋沢と五代の経済思想とその影響

(1) 渋沢の「道徳経済合一説」

① 道徳と経済、バランス論と一致論

一 経済は道徳に不可欠であり、道徳は経済に不可欠 一

渋沢はたくさんの言葉を残している。例えば、「公益は即ち私利、私利能く公益を生ず、公益となる程の私利でなければ真の私利とは言えぬ」「富を積み栄達するという様なこと、人間の道たる仁義道徳とが果たして並び行はるべきものであろうか。世間では動もすれば此の二者の関係を誤解して、仁義道徳を行えば利用厚生^{きようじん}の道にもとり、富貴栄達を欲すれば勢ひ人道に欠くる所ができるといふように解釈して居るものも無いではない。併し乍ら余は、此の両者は飽くまで合致平行することの出来るものであることを信じて疑わぬ。」

これが「道徳経済合一説」のエッセンスである。この説について、道徳と経済はバランスさせなければならぬとの解釈が行われていることが多い。つまり、あまり道徳になると利益を得ることができず、ビジネスとして成り立たない、他方、利益を追求すると不道徳になるという風に、道徳と経済は相反するものとする解釈である。しかし、このように解釈すると、この説の本質を見誤る恐れがあるとして、経営学者の田中一弘一橋大学教授は次のような解釈を与えている。道徳と経済は一方がなければ他方が成り立たない、互いに不可欠なもの同士、すなわち両者は「一致」し「不可分」のものであるというのが渋沢の真意であると。

つまり、「経済」というものは、人々の生活を心配ないように、豊かにするもので、その結果としてそれを行った人は利益・富を得る。したがって、経済活動は賤しくないどころか道徳に適うものである。他方、ビジネスにおける「道徳」とは「嘘をつくべからず」と「自己利益を第一にするべからず」の二つからなるが、不誠実な商行為は行為者に一時的には利益をもたらしても、そのような取引は持続しない。利益を上げることは大切だが、利益を独占してしまつては社会全体は富まない、他者の利益を尊重したり、利益を社会に還元することは経済に適うことである。つまり、道徳と経済は一致ないし不可分の関係にある、というのが渋沢の「道徳経済合一説」の真意である。

② 「道徳経済合一説」の背景

このように、渋沢の「経済道徳合一説」は、道徳と経済のバランス論ではなく、両方追求できるし、またしななければならないという主張であった。なぜ渋沢はこのような言説を唱えたのか。その背景として当時、二つの風潮があった。

一 商道徳の退廃、商秩序の乱れ

一つは、当時、商道徳の退廃や商秩序の乱れが著しかったことである。第二は、江戸時代の士農工商の身分秩序の下で、商業は（というよりビジネスは一般的に）、卑しいものという社会意識があったことである。今日でも日本では、なんとなくビジネスというもの、金儲

けは卑しいものという意識が多分にある。

商道德の退廃や商秩序の乱れについていえば、特に当時の日本商人の海外での評判は非常に悪かった。イギリスのロンドンスクール・オブ・エコノミックスのジャネット・ハンター教授によれば当時のイギリスの新聞誌上での日本商人の評判は、インド商人や中国商人よりもっと下で、世界最低であったという。渋沢はこのような海外での日本商人の悪評を知り、この商道德の退廃を直さなければならないと強く思ったのである。

一 商業（ビジネス）蔑視観の克服、近代産業への人材を供給する必要性

次に、ビジネスは卑しいものであるという意識についていえば、江戸時代の代表的な儒学者である荻生徂徠³³や、林羅山³⁴には、商人への強い蔑視観があった。商人は私利を追求しているのだから、その社会的地位が低くても当然という意識があったのである。渋沢はこのような社会意識を克服しなければならないと考えた。経済は決して卑しむべきものではなく、立国の基礎である。そのためにはビジネスマンの社会的地位を高め、優秀な人材が実業界に入るモチベーションを高めなければならない。これまで武士層が商人、つまりビジネスマンになることに対して躊躇感があったのを払拭するために、ビジネスは重要であることを強く主張したのである。1873（明治6）年に渋沢は大蔵省を辞めるとき、官吏というものは凡庸でもよいが、商人は賢才でなければならないとの言説を残している。福沢諭吉もしばしば慶応義塾の卒業生に対して、実業界に入って学んだことの成果を活かすよう説いている。

このように、渋沢は「私利」の追求が「義」に背かぬことを講演、言論を通じて、さらに何よりも自らが発起した会社の株式資金を募集する機会をとらえて、繰り返し力説した。こうすることによって、渋沢は新時代の「実業」が、伝統社会の「農工商」とまったく別個のものであるとの観念、意識を社会に浸透させたのである。このことは近代産業への人材の供給という点で、絶大な効果をもたらした。幕末・維新时期において、留学や読書を通じて、西洋先進諸国と日本のギャップを知覚し、変革の必要を認識し、その実現に責任を感じていたエリート層が続々と実業界に身を投じることになったからである。渋沢の「道德経済合一説」の第一の貢献は、このように、意識変革のイデオロギーを創出した点にあったといえるであろう。

（2）五代の経済思想、逸話が語るその一端

五代は、書いたものをあまり残していないが、その一端を窺い知る逸話に次のようなものがある。

友人が「五代さん、あなたはもう財を成したのだから、そろそろ守りに転じてはどうか」

³³ 荻生徂徠（1666-1728<寛文6-享保13>）：江戸時代中期の儒学者・思想家・文献学者。

³⁴ 林羅山（1583-1657<天正11-明暦3>）：江戸時代初期の朱子学派儒学者。林家の祖。

と忠告したところ、五代は「いやいや、私はいたずらに富を集めることを欲しているわけではない。天下の富は決して私すべきものではない。よく集め、よく散じ、自らを利するとともに、人を益してこそ始めて意義がある。私はもし失敗して財産を失っても、それによって国家国民を幸福ならしめることができるのならば、私の望みは十分に満たされる」と言ったという。

五代のビジネスは、個別企業としてはあまり成功していないが、後世の社会経済の基盤になるものを残している。商工会議所であったり、株式取引所であったり、大阪市立大学であったり、大阪港の施設とか、神戸港の施設とか、そのような公益性のあるものを残した。

彼は死後、100万円くらいの借金を残したと言われている。直木三十五³⁵という作家は、五代のことを書いた小説で、五代は私財を残すということよりも人の世話をすることにより関心を持っていたのではないかと書いている。五代は渋沢よりも、国益志向が強かったかもしれない。国益志向のためであろう、五代は政治にも強い関心があった。1875（明治8）年、明治の憲政史上重要な意義をもつ大阪会議³⁶が開かれたが、五代は大久保利通を助けて、その裏方を務めたのである。

また、五代は大阪での密輸とか外国商人の不正行為を厳格に取り締まった。大阪港は貿易港としては失敗するが、失敗した理由の一つに五代が外国商人に対して厳し過ぎたからとの説もある。それが故に、外国商人の多くは神戸に行ってしまった。

IV 渋沢と五代の行動と思想から学ぶ

(1) その行動から学ぶ

① 「マージナルマン」とイノベーション

渋沢は豪農、五代も武士層の出身ではあるが、共に、子供のころからすごく勉強した知的エリートだった。また、若くして郷里を離れて、薩摩とか武蔵国血洗島といった狭い郷土意識から抜け出していた。

一番重要なことは、二人が江戸時代の士農工商という身分秩序の中には収まりきれない存在となっていたことである。このように諸階層が重なりあう境界的な位置にいる人のことを「マージナルマン」と言う。アメリカのホゼリッツ³⁷という経済学者は、マイノリティ・グループや異教徒、異端派からしばしば革新的企業家が出現したことに着目し、このような社会的にマージナル（限界的な）位置にいる人ほど、既存の秩序や社会的価値に抵抗しがち

³⁵ 直木三十五（1891-1934<明治24-昭和9>）：小説家。また脚本家、映画監督でもあった。

³⁶ 大阪会議：1875（明治8）年2月11日に明治政府の要人である大久保利通が、下野していた木戸孝允・板垣退助らを政府に呼び戻そうとして企画した会議。今後の政府の方針（立憲政治の樹立）及び参議就任等の案件などが議論され、木戸と板垣は政府に復帰した。

³⁷ ホゼリッツ（Bert F. Hoselitz, 1913-）：ウィーン生まれの初期シカゴ学派の開発理論家、経済開発／発展の社会制度的な側面に着目した。起業性と利益に関する独自理論を展開。

であり、それが革新（イノベーション）の源泉になるという仮説を提示している。渋沢と五代は明治維新时期においてそのような存在だったということができよう。

また、この二人にとって、若いうちに海外に出たことが重要な意味をもった。1860年代、ヨーロッパでの資本主義がまさに発展しつつあるときに行って、そこで生活し、見聞を広めたことが大変重要である。

② 多面的活動を展開

事業面では、政府の殖産興業政策に緊密に協力する姿勢があったこと、一業専心型ではなく数多くの会社企業を興し、「よろずや」と呼ばれるほど多角的事業経営を行うゼネラリストであったこと、合本企業組織を採用することが多かったこと、専門的科学技术や経営についての知識が十分ではなかったため、外国人や高等教育あるいは海外留学の経歴をもつ人材を登用したこと、企業者間の協力関係を重視し、ビジネス団体を設立するなど財界の組織づくりに熱心であったことなどの点において、渋沢と五代は共通していた。

③ ビジョンのニューディール（新規まき直し）

渋沢と五代のような財界リーダー型企業家には特有の理念が必要であった。公益と私利の調和を唱えた渋沢の「経済道徳合一説」や五代の国益志向性のように、ビジネスの目的を金儲けのみに置かなかつたことは、これらの財界リーダーに共通する理念であった。明治日本のように不確実な時代には、綿密な計算合理性に基づいて企業家活動を行うのは難しい。社会経済の大変動期に進むべき道を探りあぐねていた人々を鼓舞するために、変革のイデオロギーを指し示すことが財界リーダーの大きな役割であった。日本と先進国とのギャップを埋めるためには、さまざまな意味で過去との、また当時の支配的価値観からの断絶を要求された。そして、このような「逸脱」「飛躍」を推進する理念となったものは、「社会のため」「国のため」という価値観や、リスクを賭するアニマル・スピリット（血気）だったのである。

④ 渋沢と五代の相違点

この両者にはいくつかの相違点があった。事業の面では、渋沢の事業が銀行、鉄道、保険、紡績など西洋からの移植産業が多かったのに対し、五代のそれは鉱山業、製藍業、製銅業など在来産業が中心であり、関心はその近代化にあった。また五代は株仲間の復活、堂島米会所の再興、両替商手形の流通促進、地租米納論など大阪の旧経済秩序の上に経済の近代化を考えていたのに対し、渋沢は、例えば西洋流の銀行制度に基づく手形制度の導入をはかるべしと考えていた。

事業の成功という点でも、渋沢の事業が第一国立銀行、日本鉄道、王子製紙、日本郵船、大阪紡績（現、東洋紡）など華々しい成功をおさめたのに対し、五代の事業は経済的には必ずしも成功しなかった。これは一つに渋沢が1931年、91歳になるまで生きて、日本の産業

革命の進行をくまなく見守ることができたのに対し、五代は 1885 年わが国の本格的産業革命が開始される以前に 49 歳の若さで世を去ったためである。

また、大阪を活動の舞台としたことも五代に制約を課したといえるであろう。五代のブレンであった加藤祐一³⁸は当時の大阪商人について次のように語っている。「大坂は人気のすすみ至ておそし。日本国中に大商富豪の多く集まりたる地は大坂に超たるはなき程なれども、交易に人気のすすまぬは交易してもせいでも、是迄の家業にて十分なりとて、手出しをせぬ人、或は新規の事に手出しするは家風になき事也など、姑息なる論をたててせぬ人などある故也」（『交易心得草』）。こうした状況であったから、五代にとっては、このような大阪商人たちをなんとか目覚めさせ、企業家精神を喚起するとともに、他方でかれらの利害をくみ上げることが肝要と感じられたのである。

思想的な面では、先に指摘したように経済道徳合一主義を唱えた渋沢も実業家は国家目的に寄与するものであらねばならないと説いたが、そのさい実業家は利を得ることによって国益に奉仕できるとした。これに対して、五代は「天下列藩志を一にして国政の大改革を起し、普く緩急の制を立て富国強兵の基を相守り、国政を振起せば、拾余年の功をまたず、亜細亜に闊歩すべし」を持論とし、さらにナショナリストイックであったといえる。それゆえ事業には営利性より国益性が重視されたのである。

（2） その思想から学ぶ

① 土農工商の身分秩序に収まりきれない存在

渋沢は「一身にして二世を生きた」と言われる。豪農であり幕臣であり、政府役人であり、実業家であったからであるが、その意味では二世どころか四世くらいを生きたということになる。一人の人物がこのように変化に富んだ人生を生き得たことは激動の時代を象徴している。

五代もそうだった。若い頃から郷土を出て、海外渡航をするなど、狭い郷党意識から抜けだしていたし、土農工商の身分に収まりきれない存在となっていた。加えて、渋沢には尊王攘夷運動での、五代には薩英戦争時の捕虜という大きな挫折経験がある。

生死に関わるような出来事を体験したり、死傷の現場を目撃するなどの体験によって、強い恐怖を感じ、それが記憶に残って、それがトラウマになり、その時の体験が何度も思い出され、あたかもその時に戻ったような恐怖を感じ続けることを PTSD というが、これに対して、挫折の経験をかえって成長の糧にする人もいる。これを Post Traumatic Growth(心的外傷後成長)というが、渋沢や五代はこれにあたるといえるであろう。

② ビジネスの道徳性、公益性を主張

ビジネスと社会に関しては、すでに述べた通り、渋沢は「道徳経済合一説」を唱えていた

³⁸ 加藤祐一（生没年不詳）：明治時代の実業家。兵庫県参事などを歴任。明治 11 年(1878)大阪商法会議所設立とともに書記長となり、会頭五代友厚を補佐して活躍。

し、五代はビジネスの国家性を主張していた。しかし、重要なことは、彼らが言っているのは「清貧の倫理」ではないということだ。道徳や倫理は大事だが、それは経済と相容れないものではなく、経済、道徳、双方とも大事だということである。

③ ニュービジネスモデルの提唱

渋沢と五代はそれぞれ「合本主義」、「商社合力」という言葉によって、「株式会社」という当時の日本にとって、一つのニュービジネスモデルの提唱を行った。その今日的意義は何か。いうまでもなく、今日では株式会社は当たり前のことだから、そのままでは渋沢と五代の主張は意味がない。しかし、ヒントはある。渋沢や五代の時代には、日本国内での「合本」「合力」が重要だったが、今日必要なのは、国境を越えてのそれである。海外企業との M&A（合併、買収）とかアライアンス（連携）である。渋沢や五代の時代には、大阪と東京、あるいは全国的な「合本」「合力」が重要だったが、これは今日で言うと、グローバルな意味での「合本主義」、「商社合力」と言うべきものである。その意味において現代においても大きなヒントになるであろう。

おわりに

— 社会には、ある種の非合理的人間（私利私欲のない人間）が必要 —

渋沢栄一や五代友厚のようなカリスマ的財界リーダーに関して、フランス文学者の鹿島茂³⁹が渋沢に関する本の中で、興味深いことを言っている。「金もうけを一生懸命やろうとしている個人に混じって、一人、非合理的に利益中立的に行動している者が存在している。これが市場全体の需給関係を調整している。このような公正無私の人がいないと市場は動かない」と。

自分の利益にならないことはしないということが「合理的」とするならば、自分の利益追求を第一にするという行動をとらなかった渋沢や五代は合理的な人間ではない。逆説的だが、このような非合理的な人間が一人いることによって社会全体の合理性が担保されているといえるのである。

リーダーという人間は、ある種、非合理的な人間である。今日、渋沢や五代のようなリーダー型財界人の活躍の場が狭まったことは事実だが、全く必要がないことではない。そういう意味では、渋沢や五代に学ぶ意義は依然大きいものがあるといわなければならない。

³⁹ 鹿島茂（1949-＜昭和 24-＞）：日本のフランス文学者、評論家、明治大学国際日本学部教授。

先人の企業家精神と高い志を学ぼう

1990年代はじめのバブル崩壊以来20年以上にわたって、日本は混迷の淵をさまよいつけてきました。追い打ちをかけるように1995年の阪神大震災、2011年の東北大震災が日本を襲いました。多くの尊い人命が失われ、生活基盤、産業基盤に甚大な損失が生じました。私たちは、これらによって受けたダメージを乗り越えて、新しい日本を築いていかなければなりません。長期の不況によって体力を消耗した国民の家計、少子高齢化、国際競争力に陰りが見え始めた日本の企業、相次ぐ企業不祥事、巨額の財政赤字にあえぐ日本の財政、液状化したかのごとき日本の政治、いずれも克服が待たれる重い課題です。これらの課題にどのようにして立ち向かっていくか、いま日本は歴史の大きな曲がり角にたっています。

「日本の再生を！」「新しい日本を！」。これらが時代の合い言葉となりましたが、これを本当に実現できるのか、多くの日本人は自信を持ってないでいるように思われます。しかし、このようなときこそ、困難に直面しながらも危機を打開し、新しい日本を創造してきた先人の叡智と勇氣に学ばなければなりません。幕末から明治の時代は、現在と同じく、いやそれ以上に、激動期でした。封建制の崩壊、鎖国から開国へ、王政復古と維新期の諸変革、文明開化、産業革命の開始など、政治・経済・社会のあらゆる面で激しい変化がありました。

危機はどのようにして克服されたのでしょうか。明治日本の経済発展はしばしば「上からの資本主義」として語られます。しかしながら、政府の役割を過度に強調してはなりません。自分の立身出世や金儲けのためにではなく、欧米列強からの政治的・経済的圧迫をはねつけるために、新しい経済社会の構築に果敢にチャレンジした民間の企業家たちの活動が基本的なエンジンとなったのです。

本講義は、このような観点から、明治日本をつくった企業家のうち渋沢栄一と五代友厚に光をあて、彼らがこの時代の社会的課題にどのように立ち向かったのか、その思想や志、倫理観はどのようなものであったのか、そしてそれらは日本の行く末にどのような影響を与えたのかを明らかにします。日本が今後も経済的繁栄を続けていくことができるかどうかは、絶えず新しい事業に挑戦する若者が**澎湃**として登場するかどうかにかかっていると思います。渋沢と五代の経験、行動、思想が受講者の皆さんの琴線に響くところがあればと願っています。

【主要参考文献】

- ・ 渋沢史料館編・刊行『常設展示目録』2000年
- ・ 島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究』日本評論社、2007年
- ・ 鹿島 茂『渋沢栄一』I、II 文藝春秋社、2011年
- ・ 渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』東京堂出版、2012年
- ・ 橘川武郎・フリーデンソン編『グローバル資本主義のなかの渋沢栄一』東洋経済新報社
2014年
- ・ 田中一弘「道徳経済合一説—合本主義のよりどころ」（橘川・フリーデンソン編同上書所収）
- ・ 宮本又郎編著『渋沢栄一』PHP 研究所、2016年
- ・ 宮本又次『五代友厚伝』有斐閣、1980年
- ・ 宮本又郎『商都大阪をつくった男 五代友厚』NHK 出版、2015年
- ・ 大阪商工会議所大阪企業家ミュージアム編・発行 『五代友厚がわかる本』2022年

2019年2月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像
(国際高等研究所庭園)